

Title	編集後記 奥付
Sub Title	
Author	白神, 俊彦
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.2 (1952. 2)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520201-0071">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520201-0071</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

英人業者のかかる進出は然し一方において經濟的自由の主張に支援されること甚だ大であつた。自由貿易は運賃を低下させる、運賃の低下に依つて取引量は増加する、取引量の増加は一國生産力を昂進せしめる。ナポレオンの大陸封鎖を契機として英本國に急速に廣まつたかかる見解が、英吉利東印度會社内部に起りつつあつた新市場獲得の欲求と相俟つて、實は會社當局をして各方面への無謀な進出をも敢て企圖させるに至つたと見て差支えない。

貿易における自由を標榜して英吉利會社の東印度諸島進出を指導したのは、實にラッフルズであつた。如何なる制限も貿易の發展を阻碍する、大資本は會社をして東洋貿易の擴大を容易ならしめ、僅かな資金にも事缺く事業家がなし得る以上の進出をも當然可能とする、會社の繁榮は取引量の増加に依つてのみ達せられる、このために會社は商人たるよりも寧ろ統治者たるべきである。ラッフルズの過激なかかる見解は會社の施策一般によく反映され、文化普及の役割をも同時に演じた英吉利會社に依る東印度諸島攻略に對しラッフルズが與へた影響は、從つて相當に高く評價されねばなるまい。

ラッフルズは然し貿易における完全な自由を主張し續けたものでは決してなかつた。「錫坑は、自國鑛業保護のため、英吉利治下に置かるべきである」。そしてここにこそ急進的な植民政治家の眞意があつたのである。從つてラッフルズは無論自國以

外の如何なる業者も勢力範圍内に進出して來ることを喜ばない。事實、ラッフルズは、東印度諸島に活潑な動きを見せ始めた亞米利加人について、若し彼等に東洋植民を許せば、東印度諸島における英吉利權益のいくつかは蹂躪されるに違ひないといつて懸念し、又厚顔にも關稅の支拂を怠つた亞刺比亞人や支那人を非難すること甚だ急であつた。そして東印度諸島を不法なこれ等外國人の自由に委ねるよりは、彼等の活動を規制し統制する方が英吉利にとつて寧ろ有利ではないかとラッフルズは考へた。

ラッフルズの異常な努力にも拘はらず、東印度諸島における英吉利の地位が大體の安定を得たのは、一八二四年の條約に依り英吉利が和蘭を懷柔し、亞米利加人の東印度諸島進出を阻止することに成功して、新嘉坡の絶對的優位を獲得した以後のこととなつたけれども、一方において和蘭は、移住者の應需を主とし、保守的な貿易政策を繼續したため、ラッフルズの好意的意圖にも拘はらず、東印度諸島における自己の商業上の勢力を急速に失墜し、ジャワ貿易は英吉利商人に占有され、英人業者は阿片や綿製品を輸出して相當な利益を擧げることが出來た。しかもかかる傾向は、英本國における産業革命の進展に續く輸出可能能力の異常な上昇と共に益々促進されたのであつた。

(渡邊 國廣)

編集後記

正月も過ぎ木枯の吹き荒ぶ頃とはなつたが、三田山上は常にもまして活氣に充ちて居り人の出入も多い。時として狂い咲きもあるが花は時を忘れずにほころびる。學園にも年中行事の一つたる學年末試験と入學試験の受付が始まつたからである。霜を踏んで山に至れば、早朝から列をなして待つ志願者の顔、試験を控えて眞剣な學生の姿。

年々歳々同じことを繰返えしていながら、この季節は學校教育に身を置く者にとつて、懐しい中にも心懐しい一ときでもあり、又「螢の光」に一抹の淋しさを抱く一ときでもある。幾とせか育くみ共に研究に勵んだ學生達もこの處試験に備えられ、本棚の片隅に追いやられた本誌を取出し、ホコリをはたいて「さてあの先生の試験に關係のある論文はなかるうか」と血眼になつて見る者もあるだろう。

然し「三田學會雜誌」は試験の時だけ使う(敢えて讀むとは申さない)ものではございませんよ。卒業後もなつかしい三田の學風に觸れ、心のふるさと頼る心の糧として頂きたい」とはこの三月螢雪の功成り、實社會——その社會は光般の防衛隊(保安隊)設置の聲明にも見らるる如く、時候の所爲ばかりでもあるまい寒々とした社會——に集立ち行く卒業生諸君に本誌編集委員の一員として贈る餞けの言葉と致したい。

(白神俊彦)

昭和二十七年一月二十五日印刷 第四十五卷  
昭和二十七年二月一日發行 第二號

禁 轉 載

本號 定價 七拾圓  
送料 四圓  
編輯者 高 村 象 平  
發行所 東京都港區芝三田豐岡町八  
印刷所 東京都港區芝三田豐岡町八  
印刷所 圖書印刷株式會社

豫約購讀料一年分 金八四〇圓(送料共)  
半ケ年分 金四二〇圓( )

豫約購讀料は發行所宛お拂込み下さい。  
誌代變更の場合は精算決濟致します。  
編集に關する用件、營業に關する用件、販賣  
申込も發行所へ願います。

發行所 東京都港區芝三田二丁目  
慶應義塾大學經濟學部研究室内  
慶應義塾經濟學會  
日本出版協會會員B二一〇一六